

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

2024年 4月 11日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 藤 洋作 様

所属部局 野生動物研究センター

職 名 教授

氏 名 三谷曜子

助成の種類	令和5年度 ・ 研究活動推進助成			
申請時の科研費 研究課題名	飼育と野生, フィールドとラボの融合による動物のwell-being指標の確立			
上記以外で助成金 を充当した 研究内容	なし			
助成金充当に関 わる共同研究者	(所属・職名・氏名)なし			
発表学会文献等	(この研究成果を発表した学会・文献等)村山恭平・鈴木一平・三谷曜子. 北海道東部沿岸におけるラッコの利用と保全に対する観光客の関心態度の分析. 令和6年度日本水産学会春季大会, 2024/03/29, 東京海洋大学品川キャンパス 東京都品川区			
成果の概要	研究内容・研究成果・今後の見通しなどについて、簡略に、A4版・和文で作成し、添付して下さい。(タイトルは「成果の概要／報告者名」)			
会計報告	交付を受けた助成金額	1,000,000	円	
	使用した助成金額	1,000,000	円	
	返納すべき助成金額	0	円	
	助成金の使途内訳	費 目	金 額	
		国内旅費	614,895	
		消耗品費	12,920	
		郵便・宅配便料	30,993	
交通費		16,020		
その他(レンタカー, 燃料等)	325,172			
当財団の助成に ついて	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) これまで実施してきた科学的調査の結果をもとにした、野生動物とヒトとの軋轢軽減を目指した合意形成プロセス研究に使用させていただきました。本助成金のおかげで、現地でのアンケート調査を実施して量的データをまとめることができ、地域のステークホルダーとの会合を実施することができました。ぜひ今後とも、長期的な視野の研究をご支援いただければ大変ありがたいです。			

## 成果の概要/三谷曜子（野生動物研究センター）

人間活動とそれに伴う地球規模の環境変動が、野生動物とヒトとの関係悪化を引き起こし、ヒトの安全で健康な暮らしをも脅かしている。生物多様性を形作る野生動物の生息地を守ることが、ヒトの健康を守ることもつながるとされるが、生物多様性保全のプロジェクトにおいては、「ヒトと動物とのバランスをどこに置くか」、という課題がある。これに対する考え方については、ステークホルダーによって大きな違いがあることから、合意形成に至るまでに価値観による違いを乗り越えなければならず、大きな困難を抱えている。本研究では、ステークホルダー間の合意形成について試験的なデータを得て、今後の研究プロジェクトへと繋げていくことを目的とした。

本研究で主な対象とした野生動物はラッコである（図 1）。ラッコは、日本周辺では北海道周辺から千島列島にかけて生息していたとされるが、毛皮を目的とした乱獲により激減し (Kornev and Korneva, 2004), 1912 年, 同じく毛皮を目的に乱獲されていたキタオットセイとともに臘虎臘肭獸獵獲取締法によって保護されるようになった。その後、個体数は回復



図 1. 採餌中のラッコ

し、近年、北海道沿岸において複数目撃されるようになり (Hattori et al., 2005), 再定着が進んでいることが伺える。ラッコの餌生物は、貝類、タコ、ウニ、カニなどの浅海域の底生生物であり、1日に食べる餌量を計算すると、成熟個体 (15–45 kg) は1日に 3–9 kg の餌を食べることになる。北海道沿岸では、これらの底生生物を対象とした漁業も盛んであることから、ラッコと漁業との競合が懸念されている。一方で、ラッコは観光資源として地域の観光業に利益をもたらすという側面もある (Gregar et al., 2020)。ラッコが再び元の生態系に戻った際の影響を把握し、地域での利活用を検討することは、持続可能かつ生物の多様性を維持した沿岸生態系の利用において極めて重要となる。

そこで本研究では、ラッコを観光資源として活用できるか、その可能性と、ステークホルダーの価値観を明らかにするため、ラッコのモニタリングツアーを実施し、参加者へのアンケート調査を試験的に実施したほか、ラッコが観察できる場所に訪れていた観光客に対してのアンケート調査、またその地域におけるステークホルダーへの聞き取りと、観光客アンケート調査結果のフィードバックを実施した。

モニタリングツアーについては、事前にラッコの生態や行動についてブリーフィングを実施したほか、チラシも配布したグループと、そうでないグループに分けた。前者では、「ラ

ッコについての理解は深まったと思われましたか?」「もっとラッコについて知りたいと思われましたか?」「ラッコがいる環境を保全したいと思われましたか?」「友人にこのツアーを勧めたいと思われましたか?」の回答において、「そう思う」を選択している割合が後者よりも高く、事前の説明やパンフレット、船頭からの情報提供によって、ツアーの価値の上昇、波及効果が見られる傾向があった。

さらに、ラッコが観察できる場所に訪れていた観光客にアンケート調査を実施したところ、観光客の60%以上が北海道外から訪れ、69%がラッコの存在を事前に認知していたことから、ラッコの存在情報の広域拡散が示唆された。また、観光客はおおむね、ラッコの利用と保全に対して関心が高いことが明らかになった。このことから、観光客はラッコを保全すべき象徴的な存在「環境アイコン」として認識しており、ラッコの利用と保全の循環を目指す取り組みにおいても、重要なアクターとなる可能性が高いことが示唆された。

地域におけるステークホルダーへの聞き取り調査では、課題解決の障壁として資金と人材確保の2点への言及が複数の問題に亘って見られた。これに対し、観光客はラッコの保全に特に高い関心を持っており、資金的な側面での協力が期待できることが示唆されたことから、今後は人材確保や関係人口の増加が必要であることが分かった。地域のステークホルダー間で、現段階である情報や資金をもとに短期的な課題と、合意形成のための論拠の集積及び実現のための人材確保が必要な長期的な課題とを整理し、個別の目標設定の下で共存への取り組みを進めていくべきであると言える。

#### 引用文献

Gregg, E. J., Christensen, V., Nichol, L., Martone, R. G., Markel, R. W., Watson, J. C., Harley, C. D.

G., Pakhomov, E. A., Shurin, J. B., & Chan, K. M. A. (2020). Cascading social-ecological costs and benefits triggered by a recovering keystone predator. *Science*, 368(6496), 1243–1247.

Hattori K., Kawabe I., Mizuno A. W., Ohtaishi, N. (2005). History and status of sea otters, *Enhydra lutris* along the coast of Hokkaido, Japan. *Mammal study*, 30(1), 41-51.

Kornev, S. I., & Korneva, S. M. (2004). Population dynamics and present status of sea otters (*Enhydra lutris*) of the Kuril Islands and southern Kamchatka. *Proceedings of the Marine Mammals of the Holarctic*, 273-278.